

瀬戸秋月

もろこしの西の湖かくやらん

には照る浪の瀬戸の月影

晴れわたった秋の夜、向う岸にある瀬戸村の空高く澄んだ月が冴え渡り、その名月が印旛沼の水に映えて、きらきらと光り輝いている。清らかな風が静かな水面を渡ってゆくと、湖面の月影は流れるようにさざ波に漂って見える。風景の美しさで有名な、もろこし（中国）の西湖も、名月の夜はきっとこのように見事な情景であろう——と臼井八景の作者は、未だ見ぬ中国の名勝に想いを寄せながら、瀬戸の秋月を右の歌に詠んでいる。（歌の「には」は波の静かで平らな水面の意）

瀬戸はこの場所から見ると、印旛沼の右手一番奥まった対岸に位置し、以前は佐倉市（土浮）から瀬戸へ渡し舟が通っていたが、印旛沼が北と西に分断されてからは、瀬戸は佐倉市と地つづきになった。その瀬戸村は印旛村を経て今は印西市となり、現在瀬戸は同市の景勝地となっている。

臼井八景のうち、「遠部落雁」や「光勝晚鐘」などの光景は、この地から失われてしまったが、三百年前に八景の作者が臼井の岸边から愛でた、「瀬戸秋月」は、今でもこの辺りから湖上に美しく眺めることができる。

選文 立原 三知男